ハンセン病隔離に抵抗の医師描く 中区で映画上映中

「コロナ禍の今こそ見て」

生家の住職語る

「コロナ禍の今こそ見てほしい」と語る円周寺の小笠原英司住職＝あま市甚目寺の円周寺で

戦中戦後にハンセン病患者の強制隔離に抵抗したあま市出身の医師小笠原登（一八八八～一九七〇年）の生涯を振り返る映画「一人になる」が、県内で初めて中区の映画館「伏見ミリオン座」で上映されている。生家である円周寺（あま市甚目寺）の小笠原英司住職（六四）は「病気の人への差別という過ちを人間は繰り返してしまう。コロナ禍の今だからこそ見てほしい」と話す。

円周寺では、漢方医だった、小笠原医師の祖父の代からハンセン病患者を診察していた。小笠原医師自身は現在の京都大病院で治療に取り組み、一九三一年、ハンセン病が「不治の疾患である」「遺伝病である」「強烈な伝染病である」という当時の言説を「迷信」だと否定する論文を発表した。

国策に一人であらがった医師の存在を知ってほしいと、小笠原住職ら真宗大谷派関係者が二年前に映画の製作実行委員会を立ち上げた。カンパを原資にして、神戸市の映画監督高橋一郎さん＝今年六月に逝去＝と共に、小笠原医師の生涯とハンセン病の歴史を振り返る映画を作り上げた。

円周寺のほか、小笠原医師が最後に勤務した鹿児島県奄美市でも撮影した。診察を受けた元患者や国の責任を問う訴訟に携わってきた徳田靖之弁護士のインタビューなどとともに、役者が当時の診察の様子を再現するシーンもある。

小笠原住職は「タイトルのように『一人になる』ことは人間にとって難しい。それでも小笠原登はなぜ、同調圧力に屈せず、医学的知見を基に国策に反対できたのか。そういうところを見てほしい」と訴える。

小笠原住職らは、名古屋市やあま市での自主上映も計画している。ミリオン座での上映は七日まで。自主上映に関する問い合わせは事務局長訓覇（くるべ）さん＝090（1587）6255＝へ。

（森若奈）